

宗教のなかの「聖戦」／「聖戦」のなかの宗教

——天理教の〈ひのきしん〉と勤労報国——

一 「聖戦」を考える

アジア・太平洋戦争が、当時「聖戦」という宗教的な用語によって語られていたことはよく知られているが、今日ではそれは空虚なスローガンにすぎなかったとされ、リアリティをもつて受けとめられることはあまりないのが実情だろう。こうした現状をふまえて、川村邦光はつぎのよう
にのべる。

アジア・太平洋戦争は、まさしく「聖戦」という言葉をもつて語られ戦い続けられた。いわば聖なる戦争、宗教戦争だったのである。このことはアジア・太平洋

戦争を考えるうえで大いに留意しておくに値する、と私は思っている。日本帝国の臣民は、国内、また朝鮮や台湾の植民地も含めた海外にあって、それぞれの領域で、皇軍兵士としてだけでなく、年齢や職業、ジェンダーに応じて、使命として「職域奉公」に専念し、天皇の命による聖戦を率先して担ったのである。」

あの戦争が、実際には帝国主義的な侵略戦争でしかなかったのだという「客観的」な認識は、いうまでもなく決定的に重要だが、かといつてそうした「正しい知識」で裁断するだけでは、「聖戦」を戦った人びとの思考や実践を理解することはできないだろう。川村が論じるように、この戦争の間、「政府・軍や新聞社、出版社、映画会社による戦

永岡 崇

争プロバガンダのための映像や写真、絵画、記念碑が街路や公園、学校、工場、軍隊に、さらには家庭にもあふれ返った²²」のであり、程度の差はあれ、この国の人びとの思考や実践を規定していったと考えられる。視覚的メディアだけでなく、さまざまな活字メディアもきわめて大きな役割を果たしたことはないだろうか。聖戦を彩るこうした表象を、たんなる非現実的なプロバガンダとして葬り去るのではなく、いわば正面から分析することは、アジア・太平洋戦争という巨大な歴史的事象の意味を探るうえで、きわめて重要な課題となるはずである。

そうした観点から、本稿では、戦時期にもっとも活発な戦争協力を行った宗教集団のひとつである天理教の教誨、「ひのきしん」をめぐる語りを、政府や軍などによって語られた「聖戦」の教義と呼べそうなものとの関係において検討する。別稿で論じたように、アジア・太平洋戦争期の天理教において、神恩感謝による奉仕行為といった意味をもつ「ひのきしん」は、国家にたいする奉仕としての戦争協力を天理教信仰の文脈から理解可能なものとする機能を担わされていた²³。だが、「ひのきしん」をめぐる言説は、天理教における戦争という問題にかかわるだけでなく、帝國日本の「聖戦」そのものを支えた文化的もしくは宗教的機制の一端を明らかにするための重要な手がかりを与えて

くれるのではないだろうか。あの戦争は、前線だけでなく、銃後における生産と消費、日常生活のあらゆる局面を動員しようとした、文字通りの総力戦だったのであり、「聖戦」を彩るさまざまな表象は、「日常生活の聖戦化」を演出しようとしていた。その意味で、国家のために尽くすあらゆる実践を包摂する総力戦期の「ひのきしん」概念は、こうした「聖戦」の教義と共鳴しあうものであったといえるかもしれない。それらの語りを比較しつつ分析することで、宗教運動における戦争という問題と、総力戦そのものの宗教性という問題との間の、合わせ鏡のような関係性を照射するのが、本稿の課題である。

二 日常生活に陥入する「聖戦」

神武天皇を祭る橿原神宮では、紀元二千六百年記念事業の一環として、一九三八年から一九三九年にかけて「建国奉仕隊」が組織され、境域等の整備事業が行われている²⁴。この事業のなかで、橿原神宮外苑に大規模な運動公園も建設され、「橿原道場」と称されたが、大阪朝日新聞社は、この建設事業についてつぎのようにのべている。

光輝ある紀元二千六百年を迎へるに当り、あたかも帝國の一大躍進期にのぞむ興亜聖戦下に在つて最も意義

深き記念事業として、この「檀原道場」は三島奈良県知事を会長とする奈良県奉祝会によつてその建設が企図せられ、肇国精神発揚の大国民運動を提唱した大阪朝日新聞社これに協賛し、加ふるに各方面特志家の熱烈なる支持と協力によつてこゝに栄光かゞやく誕生の日を迎へるに至つた⁶⁾

この引用にもあるように、この事業自体は奈良県と大阪朝日新聞社が主導したもので、「内地」をはじめ、植民地や占領地などから延べ約一二十万人が参加したとされている。このうち、約一十万人が天理教からの参加であり、彼ら／彼女たちは、「ひのきしん服」に身を包んで勤勞奉仕に従事した。鈴木良がいうように、天理教がこの建国奉仕隊に積極的に参加した背景には、当時の天理教にたいする政府当局の厳しい監視のなかで、国策協力の態度を強く打ち出さざるをえなかつたという事情がある⁷⁾。そのことをふまえたうえで、本稿で考えたいのは、建国奉仕隊において語られた「聖戦」の教義と同時代の〈ひのきしん〉にかんする語りとの間には、たんなる本意な国策協力として片づけることのできない思想的類似性が存在したのではないか、という点である。後で詳しくみるように、この建国奉仕隊は宗教色の濃厚な言説によつて彩られていた。右の引用にも「聖戦」の語がみえるが、川村によると、このことばは

マスメディアなどにおいて、「日中戦争開始の一九三七年から盛んに用いられるようになり、四〇年にピークに達し、四二年以降から次第に減少し、四四、五年になるといちだんと減つていく」という。川村はこの変化が「聖戦の大義」という理念の信憑性⁸⁾の高まりや低下に対応すると指摘しているが、建国奉仕隊が結成された時期はまさに国体ディスクールによつて構成された「聖戦」をめぐる語り⁹⁾が花盛りといった状況だったのだ。檀原神宮境域等整備事業は、前線の戦闘でもなければ、戦争遂行に直結する増産活動でもないといえるかもしれない。だが、先述したように「日常生活の聖戦化」を目指した総力戦体制において、こうした勤勞奉仕は、「聖戦」の教義を国民に浸透させる重要な「布教」の場となつたということもでき、「聖なる戦争」としてのアジア・太平洋戦争を考えるための重要な手がかりを提供してくれるだろう。

古川隆久は、この事業を推進した奈良県と朝日新聞社の「本音」は経済発展や販売部数拡大を狙つたものであり、勤勞奉仕を通じた「国民統合」は「タテマエ」にすぎなかつたとしている¹⁰⁾。それは一面では的確な指摘だろうが、そこで動員された宗教的表象が、総力戦遂行へ向けた国民の合意と自己献身を調達していった側面も軽視できないのではないだろうか。須崎横一は、宮崎県祖国振興隊をはじめ

と勤労報国の関係を探ってみたい（第五節）。

三 「聖戦」の教義

『檀原神宮と建国奉仕隊』は、境域整備に際して土木工
事事務所長を務めた内務省土木技師の藤田宗光が「此の聖
なる事業に関与し得る光栄に感激し、非才をも顧みず檀原
神宮及び檀原道場の威容を偲び、且建国奉仕隊の盛況と精
神的効果とを詳さに知悉するを以て、之を永久に記念す
べく」刊行した書物である。境域整備事業の趣旨や作業過
程などについて詳しく記録されるとともに、大阪朝日
新聞社による「建国奉仕隊指導要項」や、森清人・鶴野久
吾「皇道に則した勤労奉仕精神」も載せられており、建国
奉仕隊をめぐる宗教的な意味づけを考えるうえで、重要
な資料として位置づけることができる。

まず、三島誠也奈良県知事の挨拶によって、建国奉仕隊
の主旨とされるものをみてみよう。三島は、檀原神宮の祭
神である神武天皇の「皇居御造営」という神話的な起源と、
現代における建国奉仕隊の活動を重ね合わせて語る。

〔神武天皇に從つた「素朴な我等の祖先」は、引用者註〕 歎び
勇んで至純な心で木を伐り土を運んで皇居御造営に貴
い汗を流して奉仕したのであります、二千五百九十

め、日中戦争開始後に国民精神総動員運動の一環として全
国的な広がりをもせた勤労奉仕について、それが戦時下の
労力不足への対処をひとつの目的としていたとしながらも、
そればかりでなく、「民衆、とくに青年・学生・婦人に對
する思想動員を狙う面をもつていた」と指摘している。た
だし、須崎は祖国振興隊における「東方遥拝」や隊長への
服従、作業中の無言といった側面をとりあげて、そこに
「軍隊の規律」を見いだすが、宗教的な側面についてはふ
れていない¹⁰。しかし、建国奉仕隊の場合、次節でみるよう
に、「和氣藹々」とした作業が推奨されるなど、宮崎の事
例とは少なからぬ相違がみられ、またより宗教的表象を前
面に押し出したものであった。おそらく当時の勤労奉仕が
軍隊的であったのか／宗教的であったのか、と問うよりも、
それらの側面が不可分に結びついたかたちで国民をとらえ
ていったところにこそ、アジア・太平洋戦争の重要な特質
をみるほうが有益だろう。

そこで、第三節ではこの境域等整備事業の記録をまとめ
た藤田宗光『檀原神宮と建国奉仕隊』（一九四〇年）を中心
として、建国奉仕隊に付与された宗教的意味づけを分析す
る。つぎに第四節では、アジア・太平洋戦争末期に著され
た諸井慶徳「ひのきしん叙説」における〈ひのきしん〉論
を検討し、両者の思想を比較するなかから、〈ひのきしん〉

八年を経て今日我等は同じ檣原の地で、同じ純な心で同じ宮居の拡張整備の事業に清らかな汗の奉仕をしようとしてゐるのであります。／＼我等が建国奉仕隊結成の大眼目とする所も亦神武創業の聖地を踏み祖先と同じ姿となり切つて奉仕をしつゝ、其の役々の中に此の大いに徹せんとするものであります¹²⁾

万世一系の神聖なる天皇、そして「祖先」と「我等」が、いわば遙かな時空を超えて親しく結びつけられる。また、建国奉仕隊では「旭日に八咫鳥の羽搏く奉仕隊旗」を制定していた。「勿論八咫鳥は、神武天皇御東征の御御道筋を御先導申し上げたといふ古事にちなんだものですが、この神話の八咫鳥こそ、日本人が遠き父祖から受け継いだ真実に対する勇氣と献身の情熱を表はし、又その心の本質からして日本的行ひは常に善良さに輝いてゐるといふことを示して」いるという¹³⁾。まさに川村邦光が指摘するように、「日本帝国の戦争空間は、『古代神話』のメタファーのなかで、あるいは『古代神話』を現実として、叙事詩的に構築されていた¹⁴⁾」のである。

そして、この「古代神話」と密接に結びつけられた建国奉仕隊では、鋏をふるい、畚を担いで汗をかく肉体労働が、特権的に価値づけられることになる。本書において藤田はまず、「徳川時代に於て士農工商の区別ある如く筋肉労働

者は社会の下層部が携り幾分軽侮され下位に置く傾向があり、それが明治から昭和にかけても其の関係が著しく支配階級と労働階級の対立化するに至つた、之が高じて都会と農村とが分離し知識階級、労働者、農民の対立するが如き社会問題となつた」とのべ、近世以来「筋肉労働者」が軽んじられてきたこと、さらに資本主義が展開するにつれ、都会／農村、支配階級／労働者階級の間分離や対立が深刻化してきたことを指摘する。

そうであれば、この「社会問題」をどのように解決すべきなのが問われることになるが、藤田が提示する処方箋は、「都会と農村との親睦知識階級と筋肉労働者及び農業労働者の円満的接触」である。具体的にいへば、「階級意識を清算し労働神聖を認識せしむることであり、筋肉労働の真髓を体得し労働奉仕による筋肉労働を尊敬するやう教育して認識を高むべきであり、凡ゆる階級を網羅し生涯に一度は筋肉労働に従事せしめ其の尊さを体得さす」ことが必要なのであり、それは建国奉仕隊において実現されるはずだ。資本家と労働者とを対立させている資本主義体制そのものは問われることなく、むしろ「階級意識を清算」することが推奨され、「凡ゆる階級」に「筋肉労働」を体験させて、それへの「尊敬」の念を起こさせることで「社会問題」の解決がはかられるのだ。

では、「筋肉労働」のどこに、「凡ゆる階級」の「尊敬」を集めうる要素があるのだろうか。藤田によれば、現在世界は「持たざる国と、持てる国との絶間なる争闘」といった状況にあるが、「最後の勝利は人口、資源、武器の充実にもあれど一致協同せる国民の精神と旺盛なる体力と云はねばならぬ」のであり、「全国民が筋肉労働者と同じく困苦欠乏に耐へ得ると共に大衆を嚮導すべき崇高な精神を以てせば世界各国に伍し優越なる地位を確保し得る」。すなわち、「聖戦」たる日中戦争の勝利という目的のもと、勝敗の鍵となる「精神」と「体力」を培うことのできる「筋肉労働」が称揚され、それへの「尊敬」のなかに「階級意識」を解消させていくことが目指されるわけである。「尊敬」したからといって階級間の対立が解決されるはずはないが、ここではもう少し「聖戦」の教義が語るところに耳を傾けてみよう。

本書に収録された、国体思想家の森清人と産業報国を掲げる日本産業協働団の鶴野久吾による「皇道に則した勤勞奉仕精神」では、建国奉仕隊における、報酬を伴わない労働の意義を説いている。「日本人にとり仕事は、その生活の方便でもなく、いはんや金もうけの手段でもなく、実に生活の目的そのものであります。従つて、働くといふことそれ自体が、すでに人生の価値であり、人生の歓喜であり、

人生の幸福なのです」として、生活や金もうけの「手段」としての労働を否定し、労働は生活の「目的」そのものであり、それ自体として価値や歓喜や幸福をもたらすものだとべる。そして、建国奉仕隊においては「一切の不平等も不満もありません。ささげて求めないところに、不平も不満も起りやうはないからです」と、代価を求めない労働、「さ、げて求めざるまつろひの生活」の美しさを称えている。「まつろひ」は「至誠奉獻」を表す古語だが、森と鶴野は『万葉集』から大伴家持の歌「うつそみの八十伴の緒は／大君にまつろふもの」を引きながら、「日本は神ならなるまつろひの国なのです」と語りかける。無償の労働は、古代から引き継がれた日本人の伝統として美的に表象されるのだ。

森と鶴野はさらに、建国奉仕隊の「神前労働」がもつ神聖性に説き及ぶ。

この神前労働は、私たちに、日本人のはたらくことは天皇への仕へ事（即ち仕事）であり、従つてその仕事（仕へ事）に用ひらる、器物は、神聖なるものとてもいふべきものであるといふ觀念を、はつきりと教へてくれました。／檀原神宮の神前において、建国奉仕隊の隊長が、おごそかに拝受した「神鋏」は、それを示すものに外なりません。同じやうに、作業場付近で全

隊員に貸与された作業用具も亦すべて神の御心の託されたものでありまして、畚は神畚、棒は神棒、鍬は神鍬なのです。¹⁸⁾

奉仕隊の隊長は、檀原神宮の宮司や権宮司から「神鍬」を授与された。それだけでなく「神の御心の託されたもの」である「神畚」、「神棒」、「神鍬」を介して、神聖不可侵の天皇への「仕へ事」に携わる全隊員を神聖化する。宮司から直接に「聖別」された隊長の「神鍬」だけでなく、すべての用具を神聖なものとして位置づけた点はとくに重要だろう。そこからさらに、つぎのような論理が導き出されるからだ。

この神前労働における器具だけが、神授の神具なのではなくて、われ／＼の日常生活に用ひる器物は、すべて見えざる菊花御紋章の鏤刻されてある尊い神具なのです。何となれば、日本人にとりその仕事は、貴賤貧富の別なく、すべて 天皇陛下に対する仕へ事（即ち仕事）であり、従つてその仕事に使用する神具は、もつとも神聖なるものであるからです。（中略）商人も農民も、沖で魚をとる人も、工場ではたく人も、坑内で作業してゐる人も、みなその分にに応じてそれ／＼間接に聖戦に参加してゐるのであり、その持場々々にあって、皇運を扶翼しまつてゐるのであります。¹⁹⁾

建国奉仕隊そのものは局部的・一時的なものでしかないが、それが天皇にたいする「仕へ事」であるかぎりにおいて、日常生活におけるあらゆる労働が「聖戦」の遂行に資するものとして神聖性を付与されることになる。そうした全国民の労働の神聖化が、菊の紋章の付いた鏡と同一視された「神鍬」の授与に凝縮して表象されているといえるだろう。

ところで、建国奉仕隊において、実際の作業はどのように行われるべきなのだろうか。前節でもふれたように、宮崎県の祖国振興隊のような集団的勤労奉仕においては、「作業ノ開始ニ当リテハ東方遙拜、宣誓（祖国振興隊信条朗読）等ノコトヲ行フ」「作業の開始、休憩、終止等ハ凡テ隊長ノ指揮ニ従ヒ作業中ハ絶対無言トス」²⁰⁾などとして、厳しい規律化が意図されていた。建国奉仕隊においても、「建国奉仕隊指揮十則」に「隊員をして終始規律統制あり且つ敏活なる団体行動をなさしむべし」といった注意があり、軍隊的な規律が課されていたことはたしかである。だがその一方で、藤田が「男女混合して働くことが、全体的に和氣藹々として能率があがる」という印象を記しているように、「和氣藹々」とした作業風景があり、森らがいいうような、労働の「歓喜」の側面を重視していたともいえる。実際、この奉仕作業においては、互いに「したしみ」を抱くことが求められていた。

事を正義と邪悪に分ち、正義の道を踏み行ふことは確かに人間の強く生きる道であります。しかし、みに生きることが更に人間を強く且つ美しくします。しかし、みは真心と真心がしみ合ひ触れ合う状態で、心の靈性がそこに生き、初めて「神人一如」の境地が顕現するのです。²³

集団の厳たる規律のうちに、したしみ、が血潮となつて通ひ、協同の精神が養はれる。上に立つものはいつくしみ、下にあるものは、湧き出づるなつかしみを抱く。²⁴

「したしみ」は、人間どうしにのみ適用されるものではない。「国民の凡てが、橿原神宮の神靈に生きるならば、神と人、人と人との大調和を得て、日本は真に挙国一本に團結し、以て国本を固くすることが出来る」とし、神²⁵||皇孫||現天皇のもとで「平等」で無償の労働に身を捧げるという共同性において、すべての国民が「神靈」に満たされることによつて「挙国一本」が実現すると説かれている。このような「したしみ」の教理は、「朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ、其親は特に深かるべき」という「軍人勅諭」のことは下敷きにしたものだろうか。

『橿原神宮と建国奉仕隊』は、日中戦争下に書かれ、随所に「聖戦」の語をちりばめて、まぎれもなく総力戦の思

想を表現したテキストである。だが注意すべきなのは、中国あるいは欧米にたいする敵愾心を煽りたてるような表現はみられないということだ。その代わりに、現代と古代神話の世界とを接続させ、さらに天皇と国民、神と人との間に「したしみ」を生み出し、「神靈」に満たされた共同体を想像しようとする。「日常生活の聖戦化」を指すうえで、敵/味方を厳しく峻別した教義を説くことは、とりあえず、必要ない。非戦闘員としての国民は、凄惨な戦場のイメージに向き合うことなく、「その持場々々において、皇運を扶翼しまつ」るだけで、とりあえずは充分なのだ。その意味で、「聖戦」が単純な善悪二元論や、剥きだしの帝国主義的論理によつてのみ構築されていたと考えるのは、事態の半面をしかみていないことになるだろう。銃後における生産活動の神聖化は、天皇・皇室を中心とした内向きの共同体のイメージによつてなされていたのである。

四 諸井慶徳「ひのきしん叙説」の思想

諸井慶徳の「ひのきしん叙説」（一九四五年）は、アジア・太平洋戦争末期の一九四五年四月八日から、敗戦を挟んで二月二三日まで、天理教の機関紙『天理時報』で連載された。戦時期に書かれた作品だが、再版を重ね、今も

なお〈ひのきしん〉論の古典として読み継がれている。こうした点で、現代における〈ひのきしん〉の教義に刻みこまれた戦争の痕跡を解読するに適したテキストであるといえるだろう。とくに、諸井の作品は、総力戦期の天理教メディアに現れた露骨ともいえる国家迎合路線とはある程度の距離を保って書かれている。実際、そうでなければ、戦後における巨大な社会変化をこえて受け入れられることはなかったと思われる。「ひのきしん叙説」のこのような性格は、天理教の〈ひのきしん〉と「聖戦」の関係を思考するうえで妨げになるどころか、より深い反省的思考を促すものであると考える。戦後天理教本部の歴史認識では、戦前における権力への「迎合・奉仕」を説いた語りは、教内で守りぬかれた本来的な信仰とは異質のものであるとされ、後者の政治的無垢性が主張されている。この構図において、(若干の修正を施されつつ)時代的制約をこえて読み継がれるべきテキストとされてきた「ひのきしん叙説」を読みみなおし、そのなかの「聖戦」の痕跡を辿ることによって、戦後天理教本部が奉じる教義理解の政治的無垢性を問いなおすことができるのではないだろうか。

『天理時報』の連載を始めるにあたり、諸井は、「ひのきしん」といふ言葉は近頃無暗にもてはやされて来たやうである」と、戦時下における〈ひのきしん〉運動の盛り上

がりを確認したうえで、「しからばこの「ひのきしん」の本質は如何なるものであらうか。この問題になると一応了解のついてゐた筈の我々も矢張り或る種の困惑を禁じ得ない」とし、〈ひのきしん〉の「本質」を明らかにすることを課題として掲げる。諸井によれば〈ひのきしん〉を「勤労奉仕の本教的代名詞」と単純に言い換えることはできず、〈ひのきしん〉には他の勤労奉仕には還元できない固有の「本質」があるのだ。²⁷⁾

諸井はまず「働き」の様態を取らない「ひのきしん」はあり得ない²⁸⁾として、「働き」としての〈ひのきしん〉の重要性を説くが、その際さきの『橿原神宮と建国奉仕隊』同様、社会一般における「労働」の概念を批判的に検討し、〈ひのきしん〉における「働き」の独自性を導出しようとする。それによると、「人間の働きは「労働」なる概念のもとに包括せられて以来、不当にも或る種の蔑視をもつて遇されねばならなかつた」²⁹⁾。それはギリシア、インド、中国の古代文明以来の「蔑視」だが、とりわけ産業革命以降、「労働者はその知性も感情も殺することによって機械の付属物の如くなつたのみでなく、一切の「働き」もまた追利主義の中に付随する行動以外のものになつた。かうして労働は益々低次な物質主義に墮して行つたのである」³⁰⁾という。それでは、このように労働が「蔑視」され、

「苦しいこと、辛いこと、骨の折れることの謂³¹⁾」とされてきたのはなぜなのか。諸井によれば、「ある力行がそのこと自らの為に営まねずして、他に存する目的を達する手段として、営まれるといふことが働きに伴ふ苦痛を生ずるのである。そのこと自らのためにするのでなく、一家の生計を立てる為にこれを為し、賃金を貰ひたひためにするといふことが苦痛を招くのである³²⁾」。その点では、ナチスドイツのKDF団は、「欲びを通して力行すること」を本領とし、「西欧的労働観念に宿命的に付着してある「苦しい」の観念を排除してその力行を明朗化せんとした一つの有力な試みとして刮目すべきもの」ではあるのだが、ことさらに durch Freude としての Kraft を強調しなければならなかったことは、逆に「独逸の「アルバイト」の弱み」を示しているものだという³³⁾。

こうして西欧近代的な労働概念を批判したうえで、諸井が対置するのが、中山みきによって説かれた「働き」としての〈ひのきしん〉である。そこでは、「働き」は賃金を得るための「手段」であるというよりは、「人間の必然として働かすにはおられぬ」という「本性」の現れだとされる³⁴⁾。そして「食はんがためのみ働くのではない。人が働くといふことは人が人に対し、環境に対し、社会に対して自らを生かし表現することである³⁵⁾」。だから、「ひのきしん

とは何よりも俗世的功利の目的を超出せんとする行為である。それは結果の如何を予定しない³⁶⁾」のだ。手段↓目的という経済的原理を越え、働くことそのものに価値があり、しかもその「働き」は「人間の本性」だとされるわけである。

そして、〈ひのきしん〉の「働き」は、人間界だけで完結するものではない。「ひのきしんは神に對する自己献上である。神の世界への躍入である。そこには自他の対立はない。あるのは突々たる全一的包括者の立場のみである。ひのきしんの喜びはこゝに生まれ出る」と諸井はいう³⁷⁾。〈ひのきしん〉において「全一的包括者」たる神に自己を「献上」するとき、奉仕する自己と奉仕を受ける他者という現世的な対立は融解する。したがって、「働くことによつてのみ人々は相睦び相和して行くことが出来る。働くことを通して社会生活の中になごやかなつながりが出来て行く³⁸⁾」ということになる。建国奉仕隊における「したしみ」の教理と同じように、働く者の間に生じる和やかな共同性が重要なものとして語られるのである。

諸井は〈ひのきしん〉の日常性を重視してもいる。〈ひのきしん〉を漢字で表記すれば「日の寄進」となり、「日に神に帰依し常々に神の御心に添はんとするつとめでなければならぬ」という。こうした〈ひのきしん〉の特性

は、神社仏閣の建立に際して費用や物品を奉納するような「在来の寄進」が「特別な事ある際の奉納」であり「一時的なもの」であるのと対照させながら導きだされている。⁽³⁹⁾ こうした日常性の強調もまた、あらゆる労働を神聖化し、職域奉公を称揚した森と鶴野の語りと共通するものであるといえる。

ところで、諸井は〈ひのきしん〉が天理教に独自のものであるということ強く主張する一方、それが日本の伝統的信仰もしくは心性に連なるものだともいっている。その際に鍵となるのは、「まつり」の概念である。諸井は、「我が国においては古来神に対する人々の態度は「まつり」であり、「まつる」こととは「仕える」こと、身を捧げることだとする。つまり「日本人は献身的行為の民」なのであって、「現実的行為に則して信仰の道を発展せしめて来たのが我國の姿」なのだという。同時に、この「現実的行為」に結びついた信仰の実践として、「行」の伝統がある。水垢離、山中抖擻、断食などといった日本の行は、「た、肉体を具へたる一個の生きる人間が自分の全身全霊を挙げて神に帰依する表現としての行であつた。こゝに我國における特異なる行の立場がある」。そして「ひのきしん」とも異つた意味において真剣な行であることには違ひない。／それは日常俗間の生活において利を見て動き易い欲

の心を抑へ、高ぶらんとする我の心を捨て、欲を忘れ己を低めて、しやにむに神の懐に踊り込まんとする敢然たる自己錬行である」として、行の伝統のなかに、〈ひのきしん〉の実践を位置づけるのである。⁽⁴⁰⁾

また、身体的レベルの行為を重視する点ばかりでなく、「鎮守の神々を中心として全村全家が共々に睦み合ふ「まつり」と、「人々が相共に心をこめてつとめ励んだひのきしん」との間には、「日本の心性として深い同一底流が通じ合つてゐる」というように、共同性のイメージにおいても、日本の伝統的心性と〈ひのきしん〉とのつながりが見いだされている。⁽⁴¹⁾

身体の「働き」を重視する諸井〈ひのきしん〉論の立場から容易に推測できることだが、彼は〈ひのきしん〉の理念における肉体労働の重要性をはっきりと認識していた。〈ひのきしん〉の教義の典拠である「みかぐらうた」が「みればせかいがだんだんともつこになうてひのきしん」(二下り目)と歌っているように、〈ひのきしん〉は土木工事に代表される身体を使った奉仕行為としてイメージされることが多かった。諸井も「みかぐらうた」をふまえて「世界の人がひのきしんしてくる姿、それは奮擔なふという形態を通して具現化して来なければならない」、「ひのきしんと土持とは密接不離の關係を持つてゐる」とのべている。⁽⁴²⁾

この「奮擔なふという形態」には、具体的にどのような意味があるのだろうか。諸井によれば、それは「身をもつてする働き」で「誰でも容易に出来る仕事」なのだが、「しかしそれだけ低い働きである。汗と土にまみれ、なりふり構はずにつとめなければ出来ない仕事である。今さらこの身がそんなことをしなくてもといふ気があれば出来ない。こゝにあつては身を高める自愛の心はさらりと捨て去られねばならない」。それが「卑賤の仕事」とみなされてきたからこそ、階級、ジェンダー、年齢の差異を越えて実践することができ、そうすることで「自愛の心」を捨て去ることができるといふことだろう。そしてこうした作業は、「如何なる工事にとつても欠くべからざる基礎工程でなければならぬ」、そうした仕事である。諸井において、「ひのきしん」はこうした肉体労働にかぎらず、「神の御前に参ぜんとする念慮をもつて帰依の心情を燃やしつつ行ずる働き」が広く「ひのきしん」と呼ばれるべきなのであるが、それが凝縮して現れるのが、この「奮擔なふという形態」なのである。¹³⁾

戦局が悪化の一途をたどっていた一九四四年から四五年にかけて、天理教は政府の要請に応じ、全国の炭鉱で増産活動に従事する「いざ・ひのきしん隊」を組織した。これに参加した「ひのきしん隊」隊員のことばをみれば、諸井

の「ひのきしん」論が、当時けっして孤立した理解ではなかったことがわかる。

今まで炭坑に働くといへば先づ人間並に思はれなかつたでせう。それがどうです。日本の決戦増産の土台になつてゐます。お道もかつては人並のやうに思はれなかつた時代もありましたが、それがこの決戦の土台の炭坑に働かして頂く日が来た¹⁴⁾

この隊員と諸井はともに、肉体労働が社会的に貶められてきた歴史をふまえながら、それを「決戦の土台」「欠くべからざる基礎工程」として新たに価値づけなおしていったのである。そしてその価値転換は、とりわけこの隊員においては、石炭増産が叫ばれる総力戦という状況においてこそ実感できたことだったともいえるだろう。

五 「聖戦」と「ひのきしん」

ここまで建国奉仕隊をめぐる宗教的表象と、諸井慶徳による「ひのきしん」論を検討してきたが、両者の間にいくつかの共通点があることは明らかだろう。まず、労働を賃金獲得のための「手段」として理解する経済的原理を否定し、労働そのものに価値を認め、労働のなかに「歓喜」を見いだそうとする立場である。つぎに、労働一般のなかで

も「幾分輕侮され下位に置」かれてきた肉体労働に特權的な意義を付与し、価値秩序を転倒させることを通じて、あらゆる労働の神聖性を説く点でも共通する。さらに、どちらも集団で肉体労働を行うなかに和やかな共同性が生まれるとし、その源流として古代神話や伝統的信仰・心性といった、「民族的伝統」に遡ろうとするのである。

しかし、諸井は〈ひのきしん〉を他の勤勞奉仕から差別化しようとしていた。

特に近來は我国における勤勞奉仕が即ちひのきしんに外ならぬかの如く思はれてきた。かくてひのきしんは正しい評価へと齎らされるかの如き觀があつた。(中略)これら奉仕の觀念は、ひのきしんに就て一応の理解を助けるであらう。しかし全面的にこれを把握せしめるものではない。(中略)ひのきしんは行為の動力であり典拠である。勤勞奉仕は行為の結果であり帰結である。ひのきしんは聖なる信仰の流露である。それは奉仕のみを目的とし奉仕を、せんとする立場ではない。自ら奉仕になる立場である。奉仕の立場は自己を他者の為に使役せしめんとするものである。自己は他者の為に献ぜられる。それは美しい所行である。しかし「他者のために」をひたすら念慮とするところには、自他の対立は依然として峻別せられねばならない。そ

れは自我の否定に似て自我の強力なる潜在化を来すのである。これに反してひのきしんは神の御旨に踊り込む信仰の行為的自己表現である。そこにあつては神の世界の一あるのみである。⁽⁴⁵⁾

やや難解だが、勤勞奉仕においては、「他者のために奉仕しようとする自己」が強く意識されるため、自我が「潜在化」するかたちで残ってしまうの⁽⁴⁶⁾にたいして、〈ひのきしん〉では、神という絶対的な第三項と關係することによつて自/他の二項対立が止揚され、人びとが「神の世界」に包括されることが可能になる、ということだろう。この場合、諸井のいう勤勞奉仕における「他者」を国家だと理解するならば、直接的に近代天皇制国家を奉仕の対象とする勤勞奉仕とは異なり、〈ひのきしん〉は国家への奉仕と等号で結ばれることはない。いわば見かけ上奉仕の対象となっている近代天皇制国家をも包含する、超越者としての神がそこにはイメージされていることになり、諸井は「聖戰」の教義には回収されない天理教信仰独自の領域を確保しようとするのである。

しかし、諸井の周到な議論にもかかわらず、〈ひのきしん〉と「聖戰」との間には、やはり深いつながりを認めなければならぬのではないだろうか。まず、〈ひのきしん〉においては神との關係が重要であるといい、「働き」その

ものが目的であり、「働き」において自己と他者の対立が融解するといふとき、「働き」の政治的・社会的位置やその帰結は二次的なものとなる。そして、「ひのきしん」の源流が日本の「民族的伝統」に求められているように、諸井の〈ひのきしん〉論は少なからずナショナルな枠組みに規定されており、総力戦期のように国家的勤勞奉仕が求められるような局面では、容易に戦争協力の実践を肯定することになる。天理教の管長であつた中山正善は、建国奉仕隊への天理教の参加について、つぎのようにのべていた。

来々年、昭和一五年二月十一日の紀元節を期して、建国大和の地において紀元二千六百年祭を盛大に挙行せられることになつて居りますがそれに就きまして奈良県奉祝会では建国精神涵養のため神域の拡張に全国青少年を参加せしめ建国奉仕隊を組織しこの事業翼賛することになりました建国の地大和に在住するわれ／＼としても、この挙に参加することは、一はもつて二千六百年記念事業を翼賛するとともに又、一には教祖様の御精神を活かす尊い働きであらうと思ひます、この意味において、県主催のこの建国奉仕隊に対して、われ／＼は敢然参加する事になつたのでありますから、親神様の思召を全国に輝かすと同時にこの精神を活かして国家に奉仕する覚悟を以つて今日の結成式に臨み、

なほ今後この事業の完成まで、誠心誠意努力せられんことを望む次第であります。¹⁶⁾

正善のこの訓話では、紀元二千六百年の「記念事業を翼賛する」ことと「教祖様の御精神を活かす」ことが、なんの矛盾もなく一致させられているのである。また、一九四一年に炭鉱奉仕を行つた天理教信徒が「国民皆勞の叫ばれる今日、ひのきしんの精神を増産へ捧げて、国家に奉仕上げるのが一番適切だと思つたのであります」と語つていたように、実際に〈ひのきしん〉が実践される現場では、勤勞奉仕と〈ひのきしん〉の差異は無化されてしまうことにもなつたのだ。もちろん、諸井はこうした状況を憂慮して上の論理を構築していったのだともいえるが、彼の理論そのものが、「働き」の「手段」性の否定に意を用いる一方で、「働き」の内実を政治的な文脈のなかで思考するものではなかつたところに、それが「聖戦」を支える宗教的言説のひとつへと転化する可能性が孕まれていたのである。加えて、諸井の想定している勤勞奉仕の概念は、第三節で検討した建国奉仕隊をめぐる言説をふまえるなら、かなり不十分なものといわなければならぬ。さきに確認したとおり、建国奉仕隊では、神武天皇による橿原宮の造営という神話的起源を想起させつつ、国民が「神靈」に満たされながら、現人神としての天皇や皇室に奉仕する営みを神

聖化していった。そこでは神と人、人と人とが「したしみ」のなかで和合する共同性が称揚された。諸井の〈ひのきしん〉論ほど緻密に構築された神学とはいえないが、少なくとも地上の自己／他者関係にとどまらず、神——それは皇祖神でもあり、地上の天皇でもあるだろう——との関係を視野に入れた宗教的言説だったのである。

本稿では、建国奉仕隊における「聖戦」の教義と、諸井慶徳による戦時期の代表的な〈ひのきしん〉論とを分析して、両者の相似性について考えようとしてきたのだが、しかしこれらの言説が少なからず似ている、ということに、いったいどのような意味があるのだろうか。たとえばそれは、一方が他方に影響を与えたとか、モデルを提供したとかいったような関係を表しているのだろうか。そうした関係性は、たしかに確認できる。一九四四年の「いざ・ひのきしん隊」の出動の際には、「天理教徒の自発的な出動」を契機に、厚生省が新たな勤労働員の構想を研究していることが伝えられている。その構想では、「あくまで国民の報国の至誠による自発的な出動たらしめる」「同志的な精神結合であること」といった点が強調されており、「ひのきしん隊」が国家的な勤労働員のモデルケースとみなされていたのである。⁽⁴⁸⁾

だが、両者の直接的な影響関係を強調しすぎると、見逃

されてしまうものがあるのではないだろうか。勤勞奉仕一般と〈ひのきしん〉を区別しようとしていたのは諸井だけではなく、「いざひのきしん隊」の上か下かに、「勤勞報国」という言葉を冠せよ」ということを、時の軍需省、厚生省から強圧的に言い渡されたけど、前真柱様(中山正善、引用者註)は「ひのきしんの上に何をもって勤勞報国などという言葉を入れるのか、絶対に入れちゃいかん」と言われてました⁽⁴⁹⁾と語られるように、〈ひのきしん〉を天理教信徒の「アイデンティティー」⁽⁵⁰⁾として確保しようとする意識は教内でもかなり共有されていた。このように正善が「ひのきしんの内的本義」を守り抜こうとしたことが、「厳しい時代情勢の中にあつてかろうじて可能な抵抗」であつたとする見方もある⁽⁵¹⁾。しかしこのようなエピソードはむしろ、天理教側が「ひのきしんの内的本義」にこだわり続けながら、それが戦争協力の実践へと見事に接続されてしまったことを示しているのではないだろうか。つまり、建国奉仕隊を事例として検討した「聖戦」の教義は、信仰の中核的な実践としての〈ひのきしん〉を内面化しつつあつた一九三〇年代の天理教信徒にとって、〈ひのきしん〉の教義と深いところで響きあうものだったのであり、彼らは前者を後者の論理に手繰りよせることを通じて、総力戦の遂行を主体的に担っていたのだといえるだろう。また、「聖戦」

の教義が〈ひのきしん〉のような宗教思想・信仰と親縁性を有し、それへの読み替えを通じて実践されたことは、アジア・太平洋戦争の宗教戦争としての性格を改めて見直し、その宗教性の受け皿となった宗教教団や社会集団の思想・実践との比較を行うとともに、それらとの接触の様相を分析していく必要性を示しているのではないだろうか。

注

- (1) 川村邦光『聖戦のイコノグラフィ——天皇と兵士・戦死者の画像・表象』青弓社、二〇〇七年、九頁。
- (2) 川村前掲『聖戦のイコノグラフィ』九頁。
- (3) 永岡崇「天理教の戦争と「真情」のポリテクス——アジア・太平洋戦争期における「ひのきしん隊」の実践と信仰」『日本思想史研究会会報』二五号、二〇〇七年、同「総力戦と「革新」する天理教」『近代日本における表象と語り』（平成一八—二〇年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(B)「家族写真の歴史民俗学的研究」中間報告書・課題番号183014」、研究代表者：川村邦光）二〇〇八年、参照。
- (4) 川村前掲『聖戦のイコノグラフィ』二二二頁。
- (5) 建国奉仕隊については、藤田宗光『檀原神宮と建国奉仕隊』（阪神急行電鉄百貨店部、一九四〇年）、『紀元二千六百年祝典記録第一四巻』（ゆまに書房、二〇〇二年）、奈良県『奈良県政七十年史』（奈良県、一九六二年）、鈴木良「建国の聖地」の祝典と統合——奈良県における「紀元二千六百年」（文化評論編集部編『天皇制を問う』新日本出版社、一九八六年）、朝日新聞「新聞と戦争」取材班「新聞と戦争」（朝日新聞出版、二〇〇六年）、永瀬節治「昭和戦前期における檀原神宮を中心とした空間整備事業に関する研究——紀元二六〇〇年に際しての「神都」創出とその文脈」（『都市計画別冊・都市計画論文集』二五号、二〇〇九年）などを参照。
- (6) 大阪朝日新聞社「檀原道場奉献の日を迎へて」、藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』一五頁。
- (7) 鈴木前掲「建国の聖地」の祝典と統合」、参照。
- (8) 川村前掲『聖戦のイコノグラフィ』二九頁。
- (9) 古川隆久「皇紀・万博・オリンピック——皇室ブランドと経済発展」中央公論新社、一九九八年、参照。
- (10) 須崎横一『日本ファシズムとその時代』大月書店、一九九八年、三四三頁。
- (11) 藤田宗光「序文」、前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』。
- (12) 藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』二五一—二六頁。以下、改行は「/」で表す。
- (13) 藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』三八頁。
- (14) 川村邦光『弔い論』青弓社、二〇一三年、一六七頁。
- (15) 藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』一三三頁。

- (16) 森清人、鵜野久吾「皇道に則した勤勞奉仕精神」、藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』、五二頁。
- (17) 森、鵜野前掲「皇道に則した勤勞奉仕精神」四九頁。
- (18) 森、鵜野前掲「皇道に則した勤勞奉仕精神」四七頁。
- (19) 森、鵜野前掲「皇道に則した勤勞奉仕精神」四八―四九頁。
- (20) 「祖国振興隊要項」一九三八年。大日本青年団指導部農漁課編『青年勤勞報國運動の概況』（大日本青年団本部、一九三九年、六二頁）より引用。
- (21) 「建国奉仕隊指揮十則」、藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』二七頁。
- (22) 藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』二八頁。
- (23) 大阪朝日新聞社編「建国奉仕隊指導要項」、藤田前掲『檀原神宮と建国奉仕隊』二九頁。
- (24) 大阪朝日新聞社編前掲「建国奉仕隊指導要項」四〇頁。
- (25) 大阪朝日新聞社編前掲「建国奉仕隊指導要項」三九頁。
- (26) 「軍人勅諭」、由井正臣・藤原彰・吉田裕校注『軍隊・兵士』日本近代思想大系四、岩波書店、一九八九年、一七四頁。
- (27) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（一）」『天理時報』一九四五年四月八日付。
- (28) 諸井前掲「ひのきしん叙説（一）」。
- (29) 諸井前掲「ひのきしん叙説（一）」。
- (30) 諸井前掲「ひのきしん叙説（一）」。
- (31) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（二）」『天理時報』一九四五年四月一日付。
- (32) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（三）」『天理時報』一九四五年四月二九日付。
- (33) 諸井前掲「ひのきしん叙説（二）」。
- (34) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（二六）」『天理時報』一九四五年一月四日付。
- (35) 諸井前掲「ひのきしん叙説（三）」。
- (36) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（二三）」『天理時報』一九四五年一〇月七日付。
- (37) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（一六）」『天理時報』一九四五年八月五日付。
- (38) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（二七）」『天理時報』一九四五年一月一日付。
- (39) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（一四）」『天理時報』一九四五年五月二〇日付。
- (40) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（二〇）」『天理時報』一九四五年九月九日付。
- (41) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（二二）」『天理時報』一九四五年九月二三日付。ただし、原文では「二〇」と誤記されている。
- (42) 諸井慶徳「ひのきしん叙説（一四）」『天理時報』一九

四五年七月二二日付。

(43) 諸井前掲「ひのきしん叙説(二四)」。

(44) 「生ける信心③」『天理時報』一九四四年一〇月二九日付。

(45) 諸井前掲「ひのきしん叙説(二六)」。

(46) 『天理時報』一九三八年六月二二日付。

(47) 「鉦山勤勞奉仕座談会」『みちのとも』一九四一年一月号、三四頁。

(48) 『朝日新聞』一九四四年七月四日付。

(49) 山本元明・宇野晴義・山本正義・岡田芳来・金子仁・片山篤志・守屋政一「座談会 戦争の反省」『陽気』一九七三年八月号、六四頁。

(50) 幡鎌一弘「はたらき ひのきしん」、天理大学おやさと研究所編『天理教のコスモロジーと現代』天理大学出版部、二〇〇七年、一〇八頁。

(51) 金子昭「ひのきしん活動の歴史」、金子昭＋天理教会福祉研究プロジェクト編『天理教会福祉の理論と展開』白馬社、二〇〇四年、三九頁。

(52) このような問題意識に立つ研究として、一九四三年に特別高等警察による取締りを受けた創価教育学会・牧口常三郎の思想とアジア・太平洋戦争の思想との入り組んだ関係を分析した、島菌進「抵抗の宗教／協力の宗教——戦時期創価教育学会の変容」(『岩波講座 アジア・太平洋戦争』

岩波書店、二〇〇六年)をあげておきたい。

(南山大学南山宗教文化研究所研究員)